

いじめについての大学生の体験・認識と生活意識

鈴木康平*・山浦一保**

University Students' Life-style, Experience and Cognition of Bullying in School

Kouhei SUZUKI and Kazuho YAMAURA

(Received September 4, 1995)

We have long been investigating “bullying in school” from various points of view. In this study, 76 male and 152 female students of K-University participated as subjects, reporting their own experiences of “bullying and being bullied” in their elementary, junior and senior high school days. In addition to reporting these experiences, they were requested to respond to questions concerning the perceived possibility of eradication of bullying in school, their ideal style of life, and the factors of happiness. They gave us very stimulating information by filling out the questionnaire. As this investigation was conducted just after the occurrence of a miserable case of suicide by a male junior high school student in Aichi Prefecture, their opinions concerning the various kinds of bullying were considered to be influenced by that suicide. They reported their own experiences of bullying and being bullied and showed rather more severe judgments of bullying, compared with the results of our previous investigation.

Key words : experience of bullying, school, eradication, life-style

目 的

われわれはこれまでに様々な視点から学校でのいじめを考究してきた。すなわち、いじめの実態を把握するため、小・中学生に対しての実態調査（鈴木ら、1986）や、大学教育学部学生そして現職教師に対してのいじめ対処の調査（鈴木、1989）、あるいは、いじめの場の集団力学的考察などである（鈴木ら1992, 1993, 1994）。それらのうちでいじめ根絶視にかかわる考え方が、いじめそのものについての見解の根底にあることを示唆する資料を得てきた。ここでは、大学生、特に教育学部の学生にいじめについての体験報告を求めるとともに、いじめ根絶視の観点を軸に、いじめ一般に対する意見や学生自身の生活意識・態度、そして幸福観などが、どのようなかかわりをもっているかを把握しようとする。とくに昨年（1994年）11月、愛知県で中学生のいじめによる自殺が発生し、いじめられた様子が克明に綴られた遺書が公にされた。本調査は、いじめに対する関心が非常に高まった時期に実施された。上記事件が学生達はいじめ観に何らかの影響を与えたのではないかとの推測も含め、1989年の学生の資料とも一部、対比しながら考察する。

* 心理学科 ** 熊本大学大学院教育学研究科在学

方 法

調査対象：大学教育学部 3 年次学生 228 名（男 76 名，女 152 名）

調査期日：平成 6 年 12 月

調査方法：質問紙調査法；集合一斉調査

調査場所：大学講義室

調査内容：1) いじめられの体験（該当学年，回数，原因，いじめられ方<人数，期間，いじめられ方>，サポートの有無，いじめられの報告の有無<いじめられたことを誰かに知らせたか>，解決の仕方など），2) いじめの体験（該当学年，回数，原因，いじめ方<人数，期間，いじめ方>，加担者の有無，いじめの報告の有無<いじめたことを誰かに知らせたか>，解決の仕方など），3) 自分なりのいじめの定義，4) 人が人をいじめる理由，5) 性善説・性悪説，6) 将来の教師としていじめに対する対処法，7) いじめについての 10 個の意見に対する応答（いじめ根絶の可能・不可能の評定項目を含む），8) Spranger, E.の生活の 6 類型，9) 青木誠四郎にもとづく 6 種の生活意識・態度，続有恒らによる幸福の 14 要件について，自由記述法，5 段階尺度法，順位づけ法等を用いて質問項目を作成。

結果と考察

後述のいじめに対する意見 10 項目のうち「⑩いじめは人間のいるところには必ずあり，決してなくなることはない」への 5 段階評定で「大いに反対」「まあ反対」をいじめ根絶可能視群，「どちらともいえない」を中間群，「大いに賛成」「まあ賛成」をいじめ根絶不可能視群とした。以下，いじめ根絶可能視群を PO 群，中間群を MD 群，不可能視群を IMP 群，と記して論ずる。

1 いじめられた経験

男 76 人中 33 人 (43.4%)，女 152 人中 88 人 (57.9%) が「いじめられた経験あり」と回答した。いじめ根絶可能視 3 群別のいじめられた経験人数と割合は表 1 に示すが，その出現率には，男女とも 3 群間に有意な差はなかった。

2 いじめた経験

男 76 人中 22 人 (28.9%)，女 152 人中 70 人 (46.1%) が「いじめた経験あり」と回答した。これ

表 1 いじめられた体験の有無 人数と (%)

体験	IMP	MD	PO	
男	有	26 (49.06)	5 (35.71)	2 (22.22)
	無	27 (50.94)	9 (64.29)	7 (77.78)
女	有	56 (56.00)	17 (53.13)	15 (75.00)
	無	44 (44.44)	15 (46.87)	5 (25.00)

についても、いじめ根絶可能視3群別のいじめた経験人数と割合を表2に示すが、その出現率には、男女とも3群間に有意な差はなかった。

表2 いじめた体験の有無 人数と(%)

体験		IMP	MD	PO
男	有	15 (28.30)	3 (21.43)	4 (44.44)
	無	38 (72.70)	11 (79.57)	5 (55.56)
女	有	46 (46.00)	13 (40.63)	11 (55.00)
	無	54 (54.00)	19 (59.37)	9 (45.00)

上記1と2について、これらの出現率が多いと見るか、少ないと見るかについては、さまざまな見解があろうし、回想形式の調査の限界もあろう。しかし、ここでは調査対象のほぼ半数の学生がいじめ-いじめられの経験をしていることに注目しておきたい。

3 いじめられた時のサポーターの有無

男33人中6人(18.2%)、女88人中38人(43.2%)がいじめられたときに自分をサポートしてくれた友達がいたと回答した。われわれのこれまでの研究で、いじめられたとき、サポーターがいたケースといないケースとでは、いじめられた子の心の安定感の程度にかなりの差があることが示唆されてきた。しかし「サポーターになること自体、いじめられる側に加担することであって、サポート役にはなかなかたなえなかった」という報告から、サポーターになることが、直ちにいじめられにつながることを子ども心にも鋭く察知している様子が窺える。つまりサポーターになることの難しさの指摘であるが、それにもかかわらず、ここで得られたサポーターの存在の率(とりわけ女子において)は、高い出現率であると言える。森田洋司らが指摘するように、わが国ではいじめの仲裁者の出現率が極めて低いことから、いじめられている子の苦しさ、寂しさが容易に想像できる。親や教師は、まずは、いじめられている子にとって心の支えとなる友達の存在がいかに大きいか、改めて目を向けて欲しいと願う。ところで、以上の「いじめられた経験」「いじめた経験」「サポーターの有無」の3項目のそれぞれの出現率については、いじめ根絶視の程度の3群間に有意な差はなかった。

4 いじめられ方

自由記述を通読しその範疇化を行い、以下の大・中項目を得た。すなわち、①口頭: a「陰口」b「からかい」c「あざけり」d「悪口」e「言葉での脅し」②持ち物への侵害: f「隠す」g「捨てる」h「壊す」③いやがらせ: i「いやがらせ」j「お節介」④暴力: k「暴力を振るう」⑤強制: l「仲間による強制使役」m「たかり」⑥集団による攻撃: n「集団による組織的攻撃」o「集団による無視」p「排斥」q「まわしいじめ」の大項目6、中項目17である。これらについて根絶視群ごとに該当項目の出現率を算出したが、ここでも根絶視群間の有意な差は見られなかった。性別で見ると、女子では「集団による無視」が3群とも40-50%を占め、ついで「悪口」がIMP群とMD群において14%、PO群では7%が該当した。

5 いじめられの原因

これについても自由記述に基づき、範疇化を行い、下記の項目に纏めた。①逸脱：a「身体的特徴」b「汚辱の象徴」c「勉強の遅れ」d「精神的幼さ」e「転校（転入）」②性格：f「気の強さ」g「生意気」h「目立ちたがり」i「おとなしい」j「気の弱い」③ねたみ：k「人間関係・恋愛」l「成績」④集団：m「クラスの荒れ」n「グループ間の対立」⑤うらざり：o「いじめられた子と仲良く」p「寝返り」⑥家族：q「家族事情」⑦仕返し：r「仕返し」⑧イニシエーション：s「仲間への儀式」⑨理由なし：t「ストレス解消の対象」u「ふざけ」v「訳がわからぬまま」ここでも根絶視3群間の出現率に有意な偏りはなかった。

6 生活意識・態度

Spranger, E.の6類型、すなわち経済型、社会奉仕型、理論型、政治・権力型、審美型、宗教型と、青木誠四郎にもとづく生活意識・態度「一生懸命働いて金持ちになる」「まじめに勉強して名を挙げる」「自分の趣味にあった暮らしをする」「その日その日をのんきに暮らす」「世の中の不正とたたかい清く正しく暮らす」「自分ひとりのことを考えず社会のために全てを捧げて暮らす」をそれぞれ、順位づけ形式で回答を求めた。青木の6様式への回答を群毎に纏めて、Hays-岩原の順位合計法での推定順位を表3に示す。

表3 性別・いじめ根絶視の程度と生活態度6様式選択順位

性 群	男			女		
	IMP	MD	PO	IMP	MD	PO
金持ち	3	4.5	6	2	4	5
名譽	6	6	5	5	5	6
趣味	1	1	1	1	1	1
のんき	2	4.5	4	3	2	3
清く	5	3	2	6	6	4
奉仕	4	2	3	4	3	2

「一生懸命働いて金持ちになる」では男女ともIMP群がPO群を上回る順位を示した。この順位の傾向と逆の傾向を示した項目が「世の中の不正とたたかい清く正しく」と「自分ひとりのことを考えず社会のために」の2つの項目である。すなわち前者は、PO群男子が2位であるのに比し、IMP群は5位、後者「社会に奉仕」もPO群女子が2位なのにIMP群は4位というところに着目したい。いじめ根絶可能視群が「不正とたたかい清く正しく」「社会に奉仕」を根絶不可能視群と比べて上位に位置づけている点、人生観・生活観が垣間みられ、実に興味深いところである。

7 いじめ根絶視の程度の出現率

表4に今回の大学生と1989年の学生それぞれの群の出現率を男女別に示した。この3次元表を基にAB, C固定モデルによる尤度比検定を施したところ、年度別の根絶視群出現率に有意な偏りがみられた。すなわち1989年の学生達はPO, MD, IMP群それぞれ30%代で、各群がほぼ同程度の出現率である（偶然か否か定かではないがわれわれはその頃、小・中学生でも、同様の結果を

表4 年度別大学生(A)・性別(B)といじめ根絶視の程度(C)

性 群	男			女		
	IMP	MD	PO	IMP	MD	PO
1995年 大学生	53 (69.7)	14 (18.4)	9 (11.8)	100 (65.8)	32 (21.1)	20 (13.2)
1989年 大学生	11 (36.7)	9 (30.0)	10 (33.3)	27 (37.0)	26 (35.6)	20 (27.4)

注：人数と(%) $\chi^2_{(AC)}=27.303$, $df=2$, $p<.01$; $\chi^2_{(BC)}=0.693$, $df=2$.ns.

得ている)のに、今回の場合、男子PO群(11.8%)、MD群(18.4%)、IMP群(69.7%)、女子PO群(13.2%)、MD群(21.1%)、IMP群(65.8%)という出現率で、PO群が減少し、IMP群が増加している。IMP群すなわちいじめ根絶は不可能であると思っている群の有意な増加は、遺書を残して自殺した中学生のことがやはり大きく響いているのであろうか。

8 性善説と性悪説

これについては表5に示すように、尤度比検定の結果、性と根絶視の程度それぞれの主効果とのかかわりでその出現率に偏りのあることが示された。すなわち女子の方が性善説が多い傾向にあること、PO群では他の群に比べ性善説が多く現れ、IMP群では性悪説の出現傾向が他の群より高い傾向にあることが見出されたのである。

人は生まれながらにして善なのか、悪なのか、単純な2分法で決められるものではないことをふまえた上で、敢えていずれかへの賛意の表明を求めたのが表5の結果である。ここで直ちに、性善説・性悪説といじめ観との因果関係までは立ち入るまい。むしろ、なぜPO群では性善説に、IMP群では性悪説の方向に傾くに至ったかを探ることの方が肝要であろう。

9 いじめに対する意見への反応

次の10項目の意見に対して、それぞれどの程度賛成か反対か5段階評定を求めた。①いじめは

表5 性別(A)・いじめ根絶視の程度(B)と性善説・性悪説(C)

性 群	男			女		
	IMP	MD	PO	IMP	MD	PO
性善説	29 (54.7)	8 (57.1)	7 (77.8)	59 (59.0)	22 (68.8)	18 (90.0)
性悪説	22 (41.5)	6 (42.9)	2 (22.2)	31 (31.0)	7 (21.9)	1 (5.0)
無答	2 (3.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	10 (10.0)	3 (7.4)	1 (5.0)

注：人数と(%) $\chi^2_{(AC)}=7.186$, $df=2$, $p<.05$; $\chi^2_{(BC)}=9.914$, $df=4$, $p<.05$

人間のひどい心のあらわれで、人間として情けない行いです。②いじめは悪いことだけれど、もともと人間の心の中にある気持ちだから（いじめがあっても）仕方がないことです。③いじめは、いじめるわけがしっかりしているときは、（いじめは）許されます。④いじめは人間の自然な行いで、よいとか悪いとかの問題ではありません。⑤いじめは人間として、最低の行いです。⑥いじめは人間の自然な行いで、いじめられる方が、それによって強くなっていくので、よいところがあります。⑦いじめは悪いことですが、いじめられる方もそれによって強くなっていくのだから必要なところもあります。⑧いじめはどんなわけがあっても、許されません。⑨いじめは悪いことですが、いじめられる方にも、悪いところがあるのですから（いじめがあっても）やむをえません。⑩いじめは人間のいるところには、必ずあり、決してなくなりません。これら各項目毎に、性別、いじめ根絶視群別の平均値、標準偏差を算出して表6-1に示す。これ（表6-1）を基に性×群の2要因分散分析を施した。その結果、表6-2に示すように②④に群の主効果が有意（② $F=9.378$, $df=2$, $p<.001$ ④ $F=3.447$, $df=2$, $p<.05$ ）、⑨では群の主効果において有意な傾向が見られた（ $F=2.783$, $df=2$, $p<.10$ ）。すなわち、「②いじめは悪いことだけれど、もともと人間の心の中にある気持ちだから（いじめがあっても）しかたがないことです」という意見に対して、いじめはなくなるはずと思っている群は他の群より有意に強く反対している。また「④いじめは人間の自然なおこないで、よいとか悪いとかの問題ではありません」に対して、男子ではPO群がもっとも強く反対し、以下MD群、IMP群の順で反対の強さが弱まっている。女子ではIMP群が

表6-1 いじめに対する各意見項目における性別、根絶視群別の平均値(M)と標準偏差(SD)

性	項目別 群別	(1)		(2)		(3)		(4)		(5)		(6)		(7)		(8)		(9)		
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
男	PO(n= 9)	3.89(1.29)	1.56(0.96)	1.78(0.79)	1.22(0.42)	3.78(1.75)	1.56(0.83)	1.67(1.25)	4.11(0.99)	2.11(1.29)										
	MD(n= 14)	3.93(1.03)	2.43(1.05)	2.00(1.13)	2.00(1.13)	3.36(1.04)	2.21(1.15)	2.14(0.91)	3.50(1.05)	2.71(0.80)										
	IMP(n= 53)	3.98(0.96)	2.77(1.14)	1.81(0.78)	2.04(1.05)	3.49(1.14)	2.92(0.94)	2.00(0.99)	3.74(1.08)	2.68(1.11)										
女	PO(n= 20)	4.15(0.85)	1.85(1.01)	1.45(0.59)	1.70(0.84)	3.85(1.28)	1.85(0.91)	1.75(0.99)	4.10(0.94)	2.05(0.80)										
	MD(n= 32)	4.09(0.76)	2.34(0.81)	1.56(0.70)	1.94(0.97)	3.66(1.02)	1.94(0.75)	1.78(0.74)	3.75(0.87)	2.19(0.81)										
	IMP(n=100)	4.17(0.86)	2.70(1.15)	1.59(0.71)	1.63(0.77)	3.77(1.26)	1.75(0.82)	1.86(0.91)	3.90(1.06)	2.50(1.02)										

表6-2 表6-1に基づく2要因分散分析の結果

項目		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)
変動源	df	F	F	F	F	F	F	F	F	F
性	1	1.521	0.048	5.773*	0.007	0.953	0.274	0.677	0.505	1.930
群	2	0.060	9.378**	0.481	3.447*	0.639	1.798	0.859	2.207	2.783+
A×B	2	0.032	0.391	0.214	2.370+	0.110	1.372	0.558	0.165	0.571
誤差	222									

+ $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$

PO 群と有意な差はなく、MD 群がそれ（反対の強度）がもっとも弱い。さらに「⑨いじめは悪いことですが、いじめられる方にも、悪いところがあるはずですから（いじめがあっても）やむをえません」の意見に対しては、10%水準で有意な傾向がみられたにとどまったが、この意見に PO 群が男女とも他の 2 群に比べ反対の強度が強い。

これらの傾向から、いじめはなくなるはずと思っている群は、いじめはなくなるかどうかどちらともいえない中間群および、いじめはなくならないと思っている群に比べて、いじめに対して厳しい見方をとっていることが示唆される。とくに、ここでの 3 項目はいじめ許容の方向の意見であり、それに対する反対の程度がいじめへの厳しさを表しているといつてよいであろう。

10 幸福観

続らの幸福の要件「芸術 安らかな心 経済的独立 娯楽 自由 友情 健康 働くよろこび 知識 愛 金銭 名声 権力 宗教」の 14 項目を呈示して、被調査者各自が重要と思うもの上位 3 項目を選出するよう教示した。各項目への第 1 位に選ばれた頻数について性(A)×群(B)×幸福要件(C)の 3 次元表を作成し（表 7）、AB, C 固定モデルの尤度比検定（選択率が極端に低いか皆無の項目をその他とし 8 項目を設定）を試みたところ、性×幸福要件が有意で、女子による「愛」の選択率が男子のそれを有意に高く上回っていることがうかがえる。いじめ根絶視 3 群間に有意な偏りはみられなかった。性による偏りの方が目立った。

表 7 性別(A)・いじめ根絶視の程度(B)と幸福要件(C)

性	男			女		
	IMP	MD	PO	IMP	MD	PO
安らかな心	12 (22.6)	4 (28.6)	2 (22.2)	25 (25.0)	10 (31.3)	3 (15.0)
経済	3 (5.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.0)	0 (0.0)	1 (5.0)
自由	6 (11.3)	3 (21.4)	0 (0.0)	6 (6.0)	5 (15.6)	1 (5.0)
友情	5 (9.4)	2 (14.3)	1 (11.1)	3 (3.0)	0 (0.0)	1 (5.0)
健康	17 (32.1)	2 (14.3)	3 (33.3)	28 (28.0)	9 (28.1)	4 (20.0)
愛	7 (13.2)	1 (7.1)	2 (22.2)	32 (32.0)	7 (21.9)	9 (45.0)
金銭	1 (1.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.0)	1 (3.1)	0 (0.0)
その他	2 (3.8)	2 (14.3)	1 (11.1)	2 (2.0)	0 (0.0)	1 (5.0)

注：人数と (%) $\chi^2_{(AC)}=17.720$, $df=7$, $p<.05$

ここでは学生のいじめ観、生活意識・態度、人間観、幸福観等の観点からいじめを考察した。ここに報告しきれなかった資料も多い。これら体験報告等諸資料をさらに多面的に分析し、一人一人のいじめ-いじめられ体験や価値観が、いじめ発生の場、つまり集団の特性とどのようにかかわっていくのかを考究する上での基礎としたい。

謝 辞

本研究を実施するにあたって、貴重な体験報告を記述し、多くの質問事項に答えてくれた学生諸氏に深く感謝する。資料の統計解析にあたっては本学部助教授篠原弘章氏のコンピュータ・プログラムを使用させていただいた。記して謝意を表したい。さらに自由記述の転記補助作業に協力してくれた学部学生諸氏に感謝する。

参 考 文 献

- 青木誠四郎 1939 青年心理学 朝倉書店
 遠藤辰雄 1985 「いじめ」をめぐる非行 教育と医学, **33**, 69-75.
 古畑和孝 1986 「いじめ」問題再考 学習指導研修, **8**(11), 45-48.
 蜂屋良彦 1986 「いじめ」深刻化の社会的要因は何か 学習指導研修, **8**(11), 52-55.
 岩原信九郎 1965 教育と心理のための推計学 日本文化科学社
 文部省 1991 生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について 大蔵省印刷局
 森田洋司 1985 学級集団における「いじめ」の構造 ジュリスト, **No. 83**(6), 29-35.
 森田洋司 1986 いじめの四層構造論 現代のエスプリ, **No. 228**, 57-67.
 森田洋司・清永賢二 1986 いじめ-教室の病い- 金子書房
 森田洋司・清永賢二 1994 新訂版 いじめ-教室の病い- 金子書房
 野崎幸雄他 1985 いじめと現代社会 ジュリスト, **No. 83**6, 6-21.
 篠原弘章 1984a 行動科学の BASIC 第1巻 統計解析 ナカニシヤ出版
 篠原弘章 1984b 行動科学の BASIC 第2巻 実験計画法 ナカニシヤ出版
 篠原弘章 1989 行動科学の BASIC 第5巻 ノンパラメトリック法 ナカニシヤ出版
 Spranger, E. 1925 Lebensformen -Geisteswissenschaftliche Psychologie und Ethik der Persönlichkeit - Halle (Saale) Max Niemeyer.
 鈴木康平・佐藤静一・篠原弘章・吉田道雄 1986 いじめの社会心理学的研究 熊本大学教育学部附属教育工学センター紀要, **3**, 257-270.
 鈴木康平 1986 「いじめ」の背景・動機・対策 学習指導研修, **8**(11), 34-39.
 鈴木康平 1987 現代社会といじめ再考 教育心理, **35**(1), 6-11.
 鈴木康平 1989 いじめに対する教育学部2年次生, 教育実習生, 現職教師の認識 熊本大学教育学部紀要, **38**, 257-270.
 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1992 いじめに対する認識の発達社会心理学的研究-いじめ根絶視と「いじめ-いじめられ」の当事者に対する認知の観点から- 熊本大学教育学部紀要, **41**, 213-226.
 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1993 「いじめ-いじめられ」の場の認知-いじめへの態度と「いじめ-いじめられ」の場における学級の雰囲気と当事者の特性の認知- 熊本大学教育学部紀要, **42**, 229-245.
 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1994 いじめにかかわる集団の特性の認知 日本グループ・ダイナミクス学会第42回大会発表論文集, 90-91.
 鈴木康平 1995 学校におけるいじめ 教育心理学年報, **34**, 132-142.
 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1995 いじめ場面の集団の認知-いじめ-いじめられの立場から- 日

- 本グループ・ダイナミクス学会第43回大会発表論文集（印刷中）
- 鈴木康平・山浦一保 1995 いじめについての大学生の体験・認識と生活意識 日本グループ・ダイナミクス学会第43回大会発表論文集（印刷中）
- 高木 修 1986 いじめを規定する学級集団の特徴 関西大学社会学部紀要, **18**(1), 1-30.
- 詫摩武俊 1984 こんな子がいじめる, こんな子がいじめられる 山手書房
- 続 有恒・久世敏雄・秦 安雄 1959 青年期の生活意識について 名古屋大学教育学部紀要, **5**, 170-177.
- 牛島義友 1950 社会性の発達 依田 新（編） 教育心理学 金子書房